

インド・バラナシでの贈呈式報告 (2016年10月3-8日)

秋子孝男



バラナシ市はインドの東北に位置し、日本からはデリー空港へ10時間、国内便で1時間半の時間距離となる。人口ではインド30番目くらいの150万人弱の都市であるが、インドの母なる大河-ガンジス川のほとり、ヒンズー教の一大聖地として国内外に有名である。インドでは初めてとなる子ども用車椅子をコルカタ港経由で当地に届け、贈呈式、家庭訪問を行いました。

今回90台の車椅子を届けた団体 JAN VIKAS SAMITI (JVS) はヒンズー語音のアルファベット表記です。彼らの訳によれば Organization for People's Development の意となります。この福祉団体の設立は1997年にさかのぼり、インド全国組織 IMS (Indian Missionary Society) に属しています。事業報告書によれば年間活動事業費は一億円強相当に達し、そのほとんどをスペイン、ドイツ、UKなどの海外慈善事業団体から援助を得ています。その中でもオランダの Lilian Foundation とは2006年以降提携パートナー関係にあり、障害児(者)を含む子ども、青少年の教育、自立、福祉向上活動を進めている団体です。

バラナシ市の本部とともに、東北部を中心に4つの活動センターをもち、300名前後の障害児のセラピー、リハビリ支援を直接行い、その他2~300名の障害児を各種イベントに招へいし、より良い社会生活への支援を行っています。

10月5日午前 (デリーでのトランジット一泊後 4日昼現地入り)

バラナシ郊外の JVS 施設講堂にて障害児ならび父兄、近隣子コミュニティー関係者ら100名近くが参加し贈呈式を行った。



JVS 代表者 Fr. AlexPhilip さん



各所に手作りの歓迎バナーも



当会概要、作業活動を説明



障害児のダンス訓練成果を披露



丁寧な使用のお願いと贈呈式へのお礼



全体記念写真

下左はJVS内リハビリ室で見た赤い色の政府支給車椅子。成人サイズで子ども用としては不満が強かった。右は台湾製の障害児用三輪タイプ。座位保持装置も一部手作りのモノを活用している。



10月5日午後 5軒の家庭を訪問



暑い国です



村人も車椅子を見に集まっています



水頭症治療が予定されている子ども



脳性マヒの Kumar 君



近所の子どもたちが集まります

10月6日 バラナシ市から北東へ60 km、車で2時間の Bhitari 村へ

JVS の北東の拠点ともなっている St. Joseph School は私立ヒンズー語学校として幼稚園部から中学部までの生徒が月学費 100 円ほどの負担で学んでいる。JVS はこの村で 80 名ほどの障害をもつ子どもを支援している。小児マヒ児童などは健常児とともに学んでいる。

校内、食堂、給水設備などは 校外とは比較にならぬほど清潔に保たれており、基本的な衛生、食生活の教育にも配慮が大きいことが感じられる。雨季には田畑から毒蛇が乾地に上がってくるため！安全教育も気を付けているとのこと。



幼稚部 エデンガーデン



10月6日午後 5軒の訪問

深い農村部であることもあり、私の過去経験では見ることがないインドだった。一部には東京やシンガポールをも凌ぐバンガロール市の高層ビル、R&Dセンターの設備、オフィスデザイン、英語を駆使しITビジネスを語るビジネスマン、世界遺産群を誇る多彩な観光地などとは想像を超える格差があり、12.5億の人口を有する国の歩みの重さ、難しさを思わざるを得なかった。

JVS事務所、学校にはインド・カルカタでの活動などがノーベル平和賞受賞にもつながったマザー・テレサとローマ法王の肖像画が掲げられていた。

JVS(またメンバー)はカトリック教会色が強い団体であるが、支援を受けている子どもたちの家にはヒンズー教の神が祀られており、宗教を超え、敬虔な社会福祉活動が続けられていた。

家庭訪問をしたが、写真を撮ることを控えてしまう家庭内の光景を見ることとなった。法的には差別をなくしたはずであるが、人々の生活、因習にはカースト制の色が残っていることを説明も受け、納得せざるを得なかった。



10月7日 4軒の訪問と帰国へ

バラナシ市はヒンズー教の聖地であるとともに、仏教においてもお釈迦様が今のネパール・ルンビニで生誕し、インド・ブッタガヤで悟りを開き、このバラナシで初めて説法を語ったとされる聖地サールナート遺跡をもっている。この遺跡公園に近い Bhusaula 村で2軒、バラナシ市内から空港へ向かう Basahi で2軒の家庭を訪問した。



(下) St. Mary's 主管区教会で住込み下働きをしながら子どもを育てている



最後に

インドをこと更に重く表現できるほど理解できている者では無いが、障害をもつ子どもの多くが、貧困、衛生、食生活、教育、医療 あらゆる困難とともにあることは間違いない。

僅かな時であるかもしれないが、子どもや家族に新しい経験と楽しさを、彼らの回りにいる支援活動者に新たな手段と道具を届けることができたことは間違いない。

一生懸命に笑顔を伝えてくる彼ら、家族の感謝の表情がここでも嬉しかった。